

「十一は“土”であり、
+ (プラス) と - (マイナス) であり、
“志”は十一の心でもある」



写真上 「大樋窯変茶盃」(径 13.5 × 高さ 8.5cm)
右ページ写真上 「大樋船釉窯変聖茶盃」(径 11.5 × 高さ 10.5cm)
右ページ写真下 「大樋黒釉茶盃」(径 12.5 × 高さ 9.0cm)




Artist Clip

**十一代
大樋長左衛門**
Toshio Ohi Chozemon XI

襲名の襲は“龍の衣”。 それだけの情熱と意欲に 溢れた、十一代の新作

photo: Yasukuni Iida text: Yurie Kimura

2 016年1月27日、350年の歴史を持つ大樋長左衛門の十一代目を襲名した。「(それを機に) 気持ちも感じ方もがらりと変わりました。襲名の襲は龍の衣と書きますが、それだけのモチベーションと意欲が必要。茶盃も襲名前とは全然違うものになりました」

襲名展には、古田織部その人や初代の名品と大樋焼の船釉のルーツである三彩を意識した茶盃、裏千家大宗匠の言葉をもとに釉薬に鉄粉を混ぜた黒茶盃を始め多くの作品を出品。複数の異国の土と

大樋の土を混ぜて作った茶盃もある。「多分、土同士が驚いているでしょうね(笑)」と言われ意表を突かれた。「陶芸の技術は習うものじゃない。作りたいものをイメージできれば、努力に応じて技術は身につく」という言葉にも。「陶芸も茶道も和菓子も嫌い」と小さい頃は家業に背を向けていた。おもしろさに目覚めたのはボストン大学の大学院で陶芸を学んでいた頃。「芸術的なセンスを持ちながら茶道具一筋だった職人気質の祖父と東京藝術大学で現代アートの洗礼を受けた芸術家肌の父がぶつかる姿を見てきたことで、茶盃もアートも全部やろうと思った」と話す。修士課程修了後は現代アートの作家として国内外で活躍。襲名後も「大樋年雄」として現代アートに取り組む。

「現代アートから伝統が見つかるだろうし、またその逆もある。今まで以上に現代アートに挑み、素晴らしいエッセンスを見つけていくことが今の時代に大樋焼を作る極意。新しいことにチャレンジしながら守るべきものを見つけて

いくという僕の生き様も示したいし、常に時代の先駆けでありたいですね」

現在、十一代としては、目が不自由な人たちの茶会のための茶盃作りに、現代アーティストとしては漆喰のような素材を使った作品制作に意欲を燃やす。「シヨートスリーパーでじっとしていられない性格」というが、確かにエネルギーとアイデアが溢れ出ているのを感じる。「十一は、土であり、+ (プラス) と - (マイナス) であり、志は十一の心でもある」と新たな気づきを日々得ながら、未来に進んでいる。

おおひ・ちようざえもん 1958年、石川県生まれ。大樋焼の陶芸家・デザイナー。2016年1月、十一代大樋長左衛門を襲名。国内外で展覧会多数。

Information

高島屋美術部創設110年記念
襲名記念 十一代 大樋 長左衛門展

大阪店 6階美術画廊
5月24日(水) → 30日(火)
※最終日は午後4時閉場